

# 黄金の林檎

ないとう生

三吉はお父様もお母様も無い、可愛さうな子供でした。街はづれの古ぼけた小屋にたつた一人で住んで居て、毎日人の使ひをしたり、畑の仕事を手傳つたりして、僅なお金を貰つて淋しく暮らして居ました。

或る日、三吉は儲けたお金でパンを一斤買つて街から歸つて來ると、道傍に一人の瘦せこけた老人が、がっかりして躰んで居ます。

三吉はその老人が可愛さうに思はれたので、『もし〜御老人、何うしたんです』と尋ねますと、老人は苦しさうな聲で、

『私は貧乏なものですから、今朝から何も食べません。苦しくつて死にさうです』と答へました。

三吉は親切な子でしたから、それを聞くとすぐ自分のパンを皆出して、『さあ、これをお食べなさい』と云ひました。老人はうれしさうに御辭儀をしましたが、

『けれどもこれを皆食べては、あなたが困るでせう』と云ひました。三吉は、

『私は今朝もパンを食べましたから、晩は食べなくつても構は無。御老人は今朝から何も食べないんだから、これを皆お上りなさい』と勧めました。老人は涙を流してお禮を云つて、甘さうに皆食べてしまひました。

『あゝ御蔭で腹が一杯になりました。ほんとにあなたは親切な方ですね。御恩返しに私が善い事を

教へて上げませう。これから先他人が何んな事を云つても只ハイ／＼と素直にその云ふ通りにおなりなさい。何んな無理な事を云はれても、逆らつてはいけません。さうすればきつと出世するに相違ありません。私の云つた事をよく覚えてお置きなさい』と云つてその老人はトボ／＼と何處かへ行つてしまひました。

三吉はその晩のパンを食べ無かつたけれど、善い事をしたと思ふと嬉しくつてお腹も空きませんでした。翌朝、三吉は近所の或る金持の庭掃除に雇はれました。一日一生懸命に働いてやつと仕事が終わると、その金持がやつて来て云ふには『お前は未だ子供で一人前の仕事が出来無いから、お金をやるわけにはいか無い。その代りにこれをやる』とたゞ一つの林檎を呉れました。三吉は折角骨を折つて働いたのに、あんまり酷いと思ひましたが昨日の老人の詞を、思ひ出して、素直にその林檎を貰つて来て食べました。さうして種を取つて袋

へ入れて置きました。

翌日三吉は自分の庭へ畑を柶らうと思つて鍬で地面を掘つて居るとカチリと何か鍬の先へ當りました。何んだらうと思つて掘り出して見ると眞黒な壺でした。大變重さうなので中を開けて見るとまゝ何うでせう。寶石が一杯這入つて居るのではありませんか。三吉は夢では無いかと喜びましたするとそこを通りかゝつた例の金持がそれを見つけてました。その金持は大變慾張りだつたので、三吉の手に入つた寶が欲しくつて堪りません。そこでわざとニコ／＼しながら三吉の所へやつて来て『やあ、君は素敵な物を見付けたね。何うだ一つ私の持つてる寶物と取り代へつこしないかね』と云ひました。三吉は『何と取り代へるのですか』ときゝますと、金持は『それよりもつと大きな壺に這入つて居る金貨と取り代へやう』と云ひました。三吉も寶石より金貨の方が欲しかつたので、ウツカリ取り代へる約束しました。

『それではその壺を持つて私の家へお出で』と金持が云ひますので、三吉はそれを持つて金持の邸へ行きますと、金持は固く蓋をした大きな壺を呉れて、その寶石を取り上げてしまひました。

三吉は定めし金貨が這入つて居るのだらうと急いで家へ歸つてその壺の蓋を取つて見ると、まあ何うでせう。中には魚の腸が一杯つまつて居ました。さては欺されたかと三吉はすぐ金持の所へ談判に行きましたが、金持は却つて散々に三吉を悪口して、果ては家來に云ひつけて三吉をひどい目に合はさうとします。三吉は口惜しくつて堪りませんでした。この間の老人が『何でも素直にしろ』と云つた詞を思ひ出して何にも云はずに歸つて來ました。さうして魚の腸も何かの役に立つだらうと思つてそのまゝ取つて置きました。

或る日三吉が街の方へ行かうとする途中、『おい〜』と誰か後から呼ぶ者があります。見ると一人の男が重さうな袋をかついで立つて居ますので

三吉は『何か御用ですか』と聞きますと男は『この麥袋を街のお醫者様の所へ屈けてくれないか』と云ひます。三吉は、

『御安い御用ですが、賃金はいくら下さいますか』ときゝますと男は『賃金は先のお醫者様の方で貰らつてくれ』と云つて無理にその麥袋を三吉の肩へのせてドン〜行つてしまひました。三吉は随分酷い男だと思ひましたが、例の老人の詞を思ひ出して、黙つてその重い麥袋をかついで街の方へ歩き出しました。その日は大變暑うございまして。三吉は汗を流してやつとの事で街のお醫者様の所へ着きました。御醫者は『やあ御苦勞々々』と云つて袋を受け取りましたので、三吉は使ひ賃を下さいと云ひますと、醫者はさも氣の毒さうに、『實は私は貧乏で君に上げるお金が無い。その代り君の體を療治してやらう』と云ひます。

三吉は情無くなつて『私はどこも病氣の所はありません。それより賃金を下さいまし』と請求し

ましたが、醫者は金が無いからと云つてくれませ  
ん。三吉はもつと云ひ張らうと思ひましたが、例  
の老人の詞を思ひ出して仕方が無いとあきらめま  
した。そこでお醫者様に向つて云ふには、

『では使ひ賃はよろしうございますから、私の耳  
を掃除して下さい。耳が詰つてこまります』

醫者は喜んで三吉の耳の穴を綺麗に掃除して、  
さて云ふには『サテサテ、君は感心な子供だ。何  
と云ふ素直の子だらう。御禮にいゝ物を上げやう  
これは使ひ賃よりきつと君を喜ばせるよ』と一つ  
の藥壘を取り出しました。さうしてその藥を三吉  
の耳の中へ注ぎ込みました。

三吉はこの藥が何の益に立つのだらうと思つて  
醫者の所を出ました。少し行くと耳の傍で『やあ  
暑いね。君』と云ふ聲がします。三吉は誰だらう  
と思つて見廻しても誰もゐません。すると又『ほ  
んとかう暑くつちあ翼が汗だらけになつてしま  
ふ』と云ふ聲がきこえます。よく見るとそれは二

羽の雀が話し合つて居るのです。三吉はビツクリ  
しました。さては今の藥のお蔭で雀の詞がわかる  
やうになつたかと大喜びで少し行くと、今度は蠅  
の話がきこえます。鳥の話もわかります。三吉は  
面白くつて堪りません。あつちへ行つては犬の演  
説をきいたり、こつちへ行つては金魚の内密話を  
立聞きしたりしました。やがて段々街の真中へ來  
ると大きな立札が立つて居て、大勢の人がそのま  
はりに集つて居ます。何だと思つて三吉は近づい  
て見ると、それはかう云ふわけでした。

その國の王様のたつた一人のお姫様が大病で死  
にさうです。澤山の醫者が療治しましたが治りま  
せん。もし誰でもお姫様の病氣を治したらお聲さ  
んにすると云ふ御ふれが出ました。美しいお姫様  
の聲にならうと、いろ／＼な人が來て療治しまし  
たが治りせまん。街の人々は皆心配さうにひそひ  
そと語り合つて居ました。三吉はとても自分の力  
には及ばぬ事だと思つて池の所へ來ました。大變

涼しかつたので池のふちへゴロリと寝ますと、やがて二匹の鯉がボツカカリと水の上に浮び上りました。

三吉は鯉が何を云ふかと耳をすまして聞きますと、一匹の鯉が云ふには、

『ねエ君、人間は何と云ふ馬鹿だらう。たつた一人のお姫様の病氣が治らないつてあんなさわぎをして居るのだもの』するともう一匹の鯉が『ほんとうにね、黄金の林檎さへ食べればすぐ治るんだのに』と云ひました。三吉はこれはいゝ事をきいたと思ひましたがさて黄金の林檎が何處にあるかわかりません。

そこで鯉にきかうと思つて飛起きますと鯉はピツクリして水の中へ沈んでしまひました。それつきりいくら待つても出て来ません。仕方がないから段々と自分の家の方へ歩いて行きますと、途中に大きな榎が一本茂つて居ります。その木陰が涼しさうなので三吉はそこへ腰をおろしますと、そ

の榎の根元で何か聲がきこえます。よく見ると二匹の野鼠が話し合つて居るのです。

『君。君は何でも知つてると自慢するが、黄金の林檎の作り方を知つてゐるかい』と一匹の鼠が云ひますと、一匹は『いや知ら無いよ、君は知つてゐるか』とききますと、先の鼠は得意さうに、

『何。わけは無いさ。たゞの林檎の種を蒔いて魚の腸を肥料にして、それから唄を唱ひながらその上を三度踏めば一晩で黄金の林檎が出来るよ』

『へエ、どんな唄をうたふんだね』ともう一匹がききますと、一匹の鼠はいゝ聲でかう唱ひました。

黄金きんの林檎よ。生なつとくれ。

黄金きんの林檎が生なつたらば

お姫様はお喜び。

翌日あしたの朝のお日様の

光をあびてキラキラと、

黄金きんの林檎がキラキラと。

それをきいた時の三吉の喜びは何んなでしたら

う。三吉は大急ぎで家へ歸つて、この間金持から貰つた林檎の種を庭へ蒔きました。それから例の壺の中から魚の腸を出してそれを肥料にやつて、

さて野鼠に教つた通り『黄金の林檎よ生つとくれ』と唱ひながら、種を蒔いた上を三度踏んで置きました。翌朝何うしたかと思つて庭へ出て見るとまあ驚くぢありませんか。一本の見事な林檎の樹が青々した葉を茂げらせ、その葉の中に、ゴム鞆ほどの大きさの黄金の林檎が、朝日を浴びてキラキラと輝いて居ります。三吉は大喜びで其黄金の林檎を取つて大急ぎで街へ行きました。さうしてきつとお姫様の病を治すと申しますと、王様の家來は三吉が汚い子供なのを見てその詞を信じませぬ。三吉は何卒御姫様に逢はしてと願ふと家來は

『よし。そんならお姫様にお取次するが、もし病氣を治す事が出来なかつたら、貴様の命を取るぞ』と云ひます。

三吉はそれでも構ひませんと云ふと、お姫様の病室へ案内されました。見るとお姫様は青い顔をして糸のやうに痩せて居らつしやいます。三吉は直ぐその林檎をお食べ下さいとさし上げました。お姫様は甘さうに黄金の林檎を召上がると、これは不思議、忽ち顔色が赤味を帯びて來て、今まで寢て居たのに、元氣よく床の上へ起き上がつてニコニコとお笑ひになりました。お姫様の御病氣はすつかり治りました。

三吉は約束通り、お姫様のお躰様になり、その後國王になりましたとさ。

## 魔 法 杖

昔ある所に一人の木樵が居りました。妻が死ん

で二人の息子と暮らして居りましたが大變貧乏で